

# 上土器遺跡発掘調査報告

田代孝 (市史編さん専門委員)  
櫛原功一 (上土器遺跡調査員)  
宮沢公雄 ( )

## 一 はじめに

本遺跡は、昭和六十年に甲府市教育委員会が実施した甲府市内の遺跡詳細分布調査によって確認された遺跡である。桜井町上土器二五四番地・他を所在地とし、瓦窯址の存在が推定されるが、複合遺跡のため、名称は上土器遺跡と付けられている。それまで二十数カ所とされていた市内の遺跡が二〇〇カ所以上確認された分布調査の成果の中でも、国分寺瓦を生産した瓦窯址の発見はきわめて注目される成果の一つであった。

山梨最古の寺院としては、春日居町の寺本廃寺があり、続く寺院として、一宮町の国分寺、国分尼寺がある。これらの寺院址は近年発掘調査もしばしば実施されるようになり、個別的には伽藍配置や瓦などの問題が深められつつある段階となってきた。

とくに、これらの寺院址から出土する瓦は、その寺院の創建年代や廃寺になるまでの変遷を知ることができるものであり、また、多

量に用いられた瓦の生産地（供給地）や製作技術の系譜などを解明するうえできわめて重要な考古資料となっている。

上土器遺跡は、一宮町に所在する国指定史跡の甲斐国分寺に深くかわる生産遺跡であり、古代寺院址および瓦窯址の研究において、究明すべき極めて重要な遺跡という認識のもとに、今回、甲府市史編さん委員会の考古・古代・中世部会によって市史編さんの一環として発掘調査に至った。

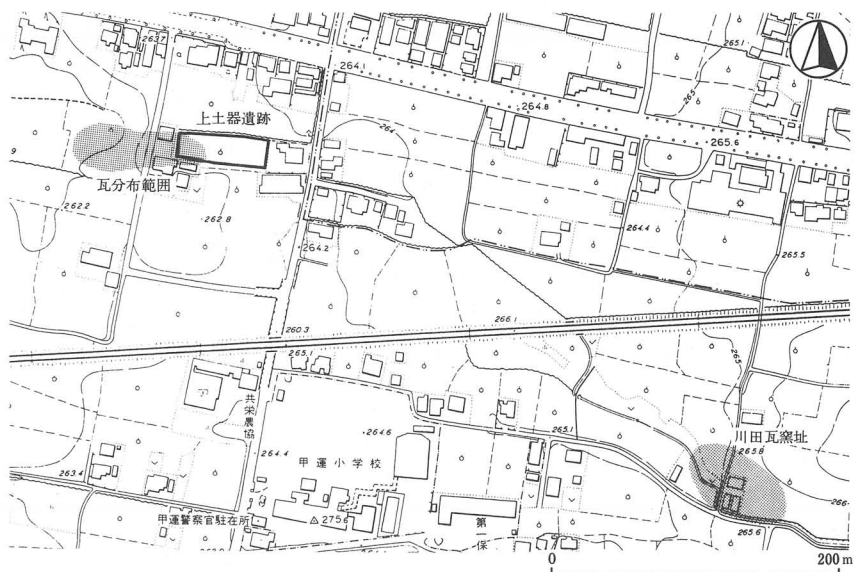
## 二 地理的・歴史的環境

上土器窯跡は市街地東部にある桜井町上土器地内に所在し、発掘調査地点は上土器二五四番地、山田哲氏宅の南側の樹園地である。なお、山田氏宅の北に面して東西に青梅街道が走り、調査地点の南方一二〇mには中央本線が走る。東方三〇mほど道路を境として石和町松本となる。西側は樹園地が続いている。

桜井町地区は大蔵経寺山の山裾一带を主体とした地区であり、横



第1図 遺跡の位置 (1)



第2図 遺跡の位置 (2)

根町・和戸町・川田町および石和町松本などと接している。この一帯は大山沢川・平等川流域の沖積地であり、低平な地形となっている。調査地点付近の標高は二六三mほどである。この沖積地では、これまでに五〇カ所近い遺跡が報告されている。遺跡の時代も原始の縄文時代から中、近世までと長い時代にわたっている。

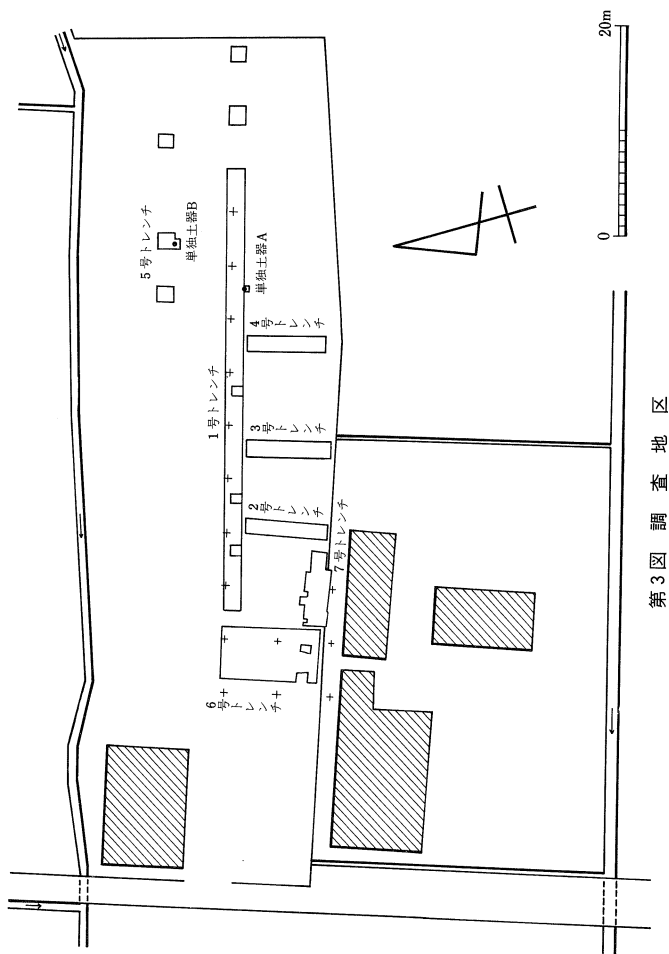
従来、横根の山田古墳・大坪遺跡、川田の川田瓦窯跡等が知られていたが、昭和六十年の分布調査によって、河川や水路等により微高地状となった地域に、古墳時代から平安時代にかけての遺物散布が濃いことが確認されている。なお、「甲斐国山梨郡表門」のヘラ書き土器が発見された大坪遺跡は、長径五〇〇mをこえる大集落の可能性が考えられ、この地域の中心的集落を形成していたことが指摘されている。この大坪遺跡の東側にあたる川田には川田瓦窯址があり、これと四〇〇mほど離れて所在するのが上土器窯址である。このことから集落が工人集団のムラであったことが推定されるところである。

本遺跡は生産遺跡であり、瓦窯址の構造や工房址の存在および瓦などの調査成果が期待されるが、集落との関係など明らかにしておかなければならない課題も多い。

### 三 調査経過

十一月十六日に器材を搬入した後、一・五m×四一・五mのトレンチ（1号トレンチ）を設定して調査を開始した。また、トレンチ内の三ヶ所に一m四方の深掘りを行ない、土層観察を行なった。トレンチ内では、東端から一一m西の地点で三〇cmの深さから北向きに横倒しになった弥生時代末期の台付甕がほぼ完形のまま出土した。

その周辺を精査したが住居、土坑等の掘り込みは確認できなかった。十一月十七日には一号トレンチ南側にトレンチを3本設定し（2号トレンチ）掘り下げた。このうち2号トレンチ北側で、炉体土器とともに多くの土器片が出土したため住居址として認定したが（1号住居址）、壁・柱穴等は不明であった。十一月十八日には一号トレンチの西側をボーリング棒で探査したところ、瓦の集中箇所が確認されたため、五m×九mの調査区（6号トレンチ）を設定し、全面的に掘り下げた。その結果、多量の瓦の堆積が出現した。また、6号トレンチの東側に7号トレンチを設定した。十一月十九日には6号トレンチの北側で鬼高期のほぼ完形の坏が二点出土したほか、甕などが同レベルで出土したため住居として認定したが（2号住居址）、壁・竈などは確認できなかった。その後数日間遺物を残しながら掘り下げを続行した。十一月二十一日には渡辺広勝氏（テラ・インフォメーション・エンジニアリング）にお願いして、調査区周辺を地中レーダーによって探査していただいた。その結果、今回の調査区内には6・7号トレンチ以外に瓦の集中箇所は認められなかったが、調査区西側に隣接するブドウ畑中には数基の窯跡と考えられる反応があり、表土中より瓦が採集された。十一月二十四日には掘り下げと併行して6・7号トレンチの遺物実測のための遣り方を組み、実測を開始した。十一月二十六日には6号トレンチ内の実測を終了し、引き続き7号トレンチの実測を開始した。また、山梨文化財研究所の外山秀一氏により、1号トレンチ内の深掘り箇所において古環境研究のための土層サンプリングが行なわれた。十一月三十日には実測調査をほぼ終了し、遺物の取り上げを始めた。十二月一日には遺物を取り上げ、更に下層を掘り下げた。



第3図 調査地区

また全測図を作成した。十二月四日には6号トレンチ内に三本のサブトレンチを設定し掘り下げ、土層を観察した。また調査区の各所に試掘ピットをあけたところ、調査区東側で鬼高期の甕がほぼ完形のまま西側に倒れて出土した。土器内には空間部を残して泥が堆積していた。十二月八日にはサブトレンチの断面図を実測した。また7号トレンチ内の瓦集中部を平面図の作成後掘り下げた。その後降雪があり、雪解け水がトレンチ内に浸入し調査は停滞した。十二月十七日には7号トレンチ内にベルトを残しながら掘り下げ、土層の堆積状況を調べた。十二月十八日にはベルトの断面図を作成した後ベルトを撤去して精査したところ、ピットが検出された。十二月十九日に道具を片付け、遺物を搬出して調査を終了した。

調査に要した日数は延べ二十八日、調査面積は約二一〇㎡である。

#### 四 基本層序

1号トレンチ内に、基本層序を確認するための深掘りを三ヶ所に入れて土層を観察した。そのうち土層の堆積が安定した西端南壁（第5図左上）を基本層序として説明する。

I層―暗褐色土（有機質の耕作土層。φ〇・五cm程度の小礫、炭化物、焼土を少量含む。）

II層―灰黄褐色粘土（灰色の粘土を多く含む、粘性は強い。褐色汚染がやや強い。φ一cm程度の礫を微量、炭化物を少量含む。）

III層―暗灰褐色砂粒混合粘土（砂粒をやや多く含む。褐色汚染がやや強い。炭化物を微量含む。遺物包含層。）

IV層―暗灰褐色粘土（褐色汚染が強い。）

V層―暗褐色粘土（褐色汚染がきわめて強い。軟質である。）

VI層―暗灰色粘土（VII層が部分的に混入する。砂粒を少量含む。褐色汚染はやや弱い。）

VII層―灰白色粘土（きわめて粘性が強い。しまりは弱い。）

VIII層―青灰色粘土（粘土、しまりに共に強い。）

IX層―暗灰白色粘土（粘性、しまりに共に強い。）

X層―青灰色粘土（粘性が強い。）

XI層―暗灰褐色ガラス質火山灰（厚さ五cmのガラス質火山灰層である。粒径は細粒砂大で、分級は良好である。火山ガラスの形態はバブルウォール型を呈す。その屈折率は $n \parallel 1.499 \sim 1.501$ のレンジをもち、モードは $1.500$

である。以上のことから始良Tn火山灰―AT―に同定される。）

XII層―青灰色砂（雲母・長石を多く含むやや粗い砂層。粘性はない。）

XIII層―褐色砂（雲母・長石を含む非常に粗い砂層。粘性はない。）

#### 五 発見された遺構と遺物

調査区内からは、古墳時代後半（鬼高期）の住居址二軒、奈良時代の瓦窯址に伴う灰原一ヶ所が検出されたほか、弥生時代末期の台付甕（単独土器A）と古墳時代後半の甕（単独土器B）がそれぞれ単独で出土した。

出土遺物は弥生時代末期～古墳時代後半の土器、奈良時代の瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切り瓦）・埴、平安時代の土師器・須恵器・鎌である。その量はコンテナ約四〇箱に及ぶ。

#### 1 遺構

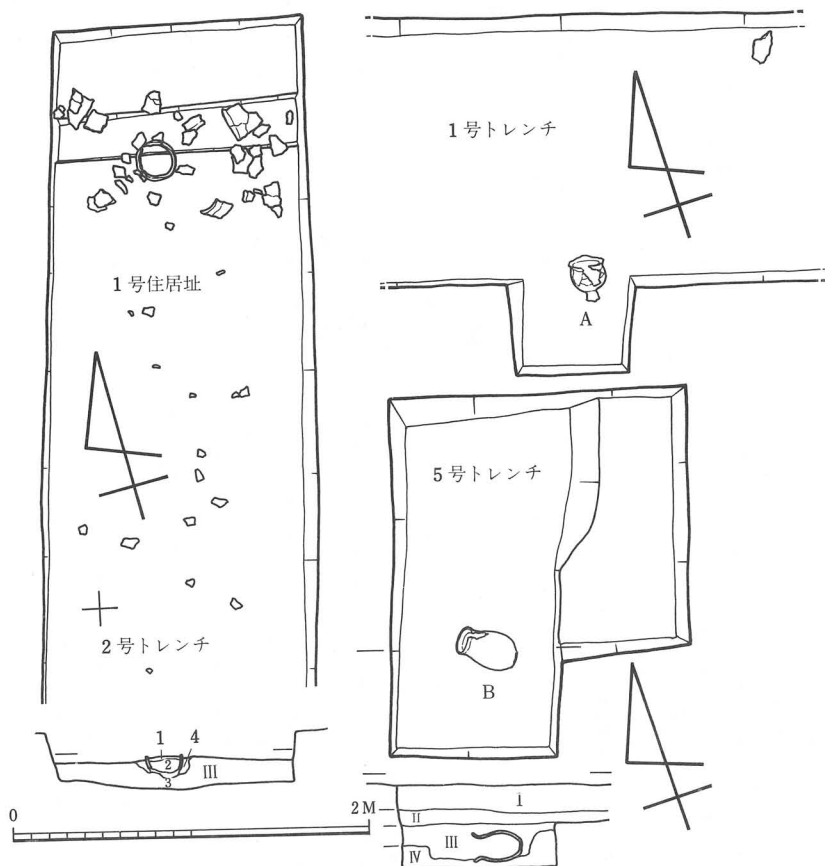
##### （1）1号住居址（第4図）

2号トレンチ内の北側に位置する。表土から僅か一二cmの深さで確認された炉体土器と、その周辺に散在した鬼高期の土師器から住居址と判断したが、ビット・壁等の施設を確認するには至らなかった。炉体土器は、III層中に直径二〇cm、高さ一〇cmの甕胴部を逆位に埋設したもので、内部の土層は次の通りである。1層―暗赤褐色土（焼土、炭化物を含む。） 2層―暗灰褐色土（褐色汚染を受ける。） 3層―暗灰褐色土（焼土を含む。） 4層―暗赤褐色土（焼土を含む。） 炉体土器の周辺には焼土のほかに炭化物が多く

認められた。また遺物は焼土や炭化物と同レベルで、炉体土器周辺の一×一・五m付近を中心にⅢ層直上に押しつぶされたように出土した。従って床面はⅢ層上面であらうと思われるが、特に堅くしまった部分はない。また貼り床を確認することはできなかった。なお、遺物の遺存状況が比較的良好であるにもかかわらず、遺物包含層が極めて浅い点から床面上部の壁等の遺構については既に消失している可能性が強い。

## (2) 2号住居址(第5図)

6号トレンチ内の北側に位置する。Ⅲ層中に鬼高期の土師器坏・甕・手捏土器がほぼ同レベルで検出されたことから住居址としたが、床面・ビット・壁等の施設は明らかでない。6号トレンチ内の東西サブトレンチ、及び中央サブトレンチの断面観察でも明確な壁の立ち上がりや床面を捉えることはできなかった。遺物の分布範囲は東西四・三m、南北四mである。遺物のなかで、甕(第15図8)と手捏土器(第15図6)はまとまって出土した。また小型甕(15図7)は坏(第15図3)の上に正位に重なって出土した。小型甕と坏の周辺及び西側には炭化物混じりの焼土が薄く堆積していたが、



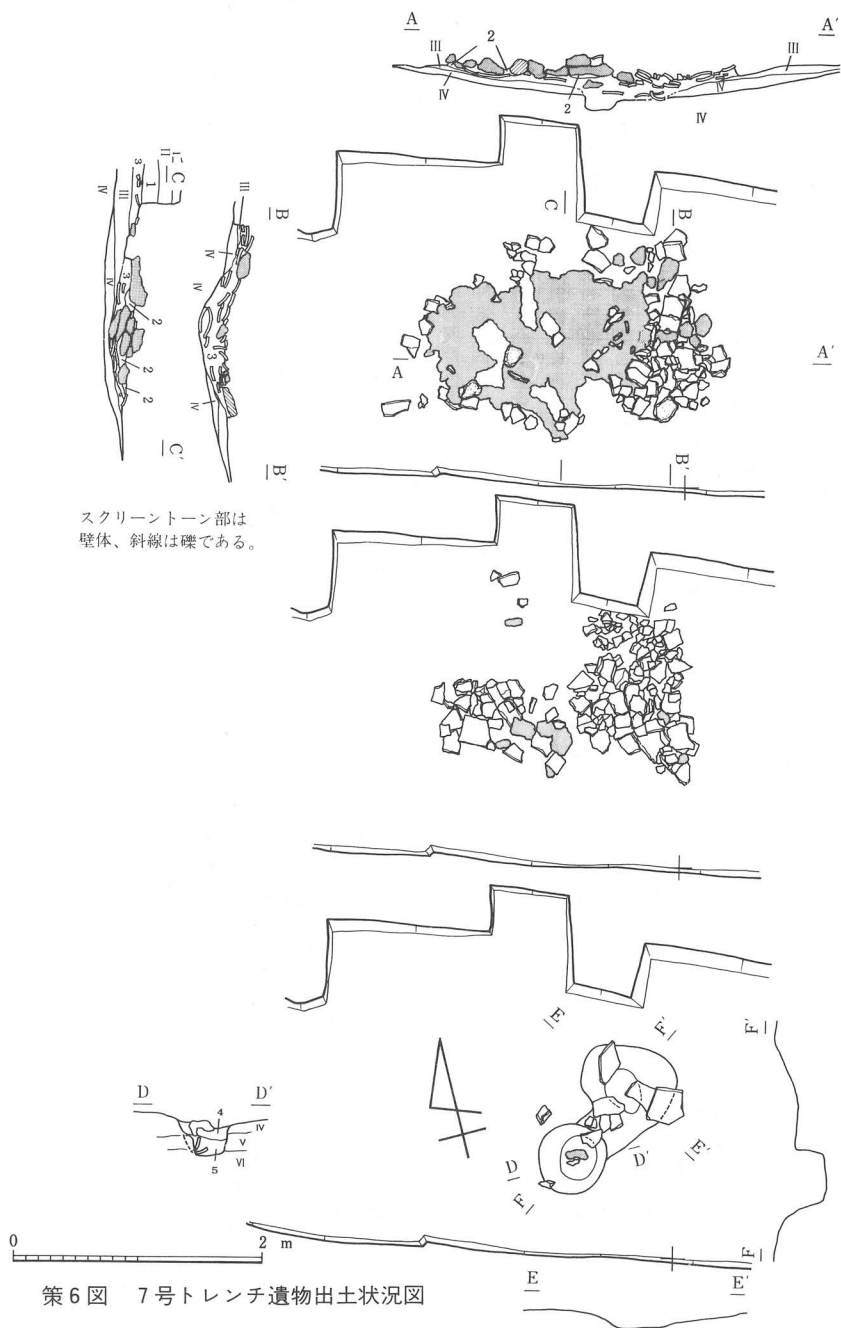
第4図 1号住居址・単独土器A・B



第5図 1・6・7号トレンチ遺物出土状況図







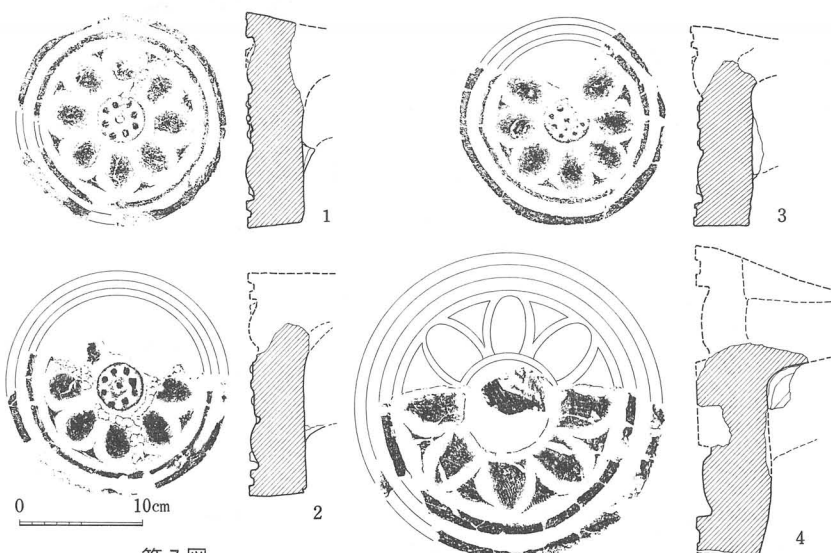
ことを最初に断っておきたい。発見された瓦の種類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅切り瓦がある。なお、文字瓦は現時点では未発見である。

a 軒丸瓦(1~4)

山田氏の表採品を含めて二種類(AI・II型式)、一・二点出土した。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦(AI型式)(1~3) 内区には1+6の蓮子をもつ低く突出した中房と、卵形に丸く隆起した八葉の蓮弁をもち、各弁間にはやや高く突出した間弁がある。外区には隆起した二重の圏線が巡る。瓦当裏面に指頭、あるいは棒状工具で半円形の溝を付けた後、印籠付けによって丸瓦部と瓦当部を接続する。丸瓦部凸面は縦方向のヘラ削りによって調整する。色調には還元炎焼成による灰白色、酸化炎焼成による褐色・明褐色・暗褐色、その中間の灰褐色を呈するものがある。灰白色のもの多くは内部まで均一であるが、その他のものは内部がサンドイッチ状に黒くなっている。胎土には長石を主体に雲母・石英が含まれる。また白色を呈する粘土を少量加えてよく練られた胎土を示すものがある。小破片を含めて一〇点出土し、二種類の範を確認した。

AI型式1類(1・2) 各部位の計測値は、瓦当径一六・七~一七cm、内区径一二・八cm、中房径四cm、中房高〇・二cm、蓮子径〇・七cm、間弁幅二~三cm、弁長三・四cm、弁幅二・八cm、外区幅二cm、外区高〇・七~一・二cm、瓦当厚四・二~四・七cmを測る。瓦当面には乾燥時のヒビに対して径五mmの棒状工具で連続刺突を加えている。範の木目が比較的明瞭である。瓦当面に長石を主体とした砂粒が部分的に付着し、範を押圧する際の「離れ砂」であろうと



第7図

思われる。一宮町甲斐国分寺跡<sup>(3)</sup>、八代町久保遺跡<sup>(4)</sup>で同范瓦が出土している。

A I 型式 2 類 (3) 1 類と同文であるが異范で、1 類よりもやや小型である。各部位の計測値は、瓦当径一六・二～一六・四 cm、内区径一二・三 cm、中房径三・八 cm、中房高〇・三 cm、蓮子径〇・五 cm、間弁幅一・八～二・二 cm、弁長三・七 cm、弁幅二・八 cm、外区幅二・二 cm、外区高〇・八 cm、瓦当厚四・二～四・四 cm を測る。丸瓦部及び瓦当裏面には縄叩き痕が残る。甲斐国分寺跡・国分尼寺跡で同范瓦が出土しているが、国分寺跡出土の A I 型式 2 類は概して瓦当裏面に縄叩き痕が残り、この類の技法上の大きな特徴といえるかもしれない。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦 (A II 型式) (4) 非常に大きな瓦当径と、無文の中房が特徴的である。中房は高く突出し、八葉の蓮弁は砲弾状に高く隆起する。各弁間には楔状に深く入り込んだ大きな間弁が高く突出する。外区には高く隆起した二重の圏線が巡る。印籠付けにより接続した後、瓦当裏面の接合部に補った粘土には指頭圧痕が大きく残されている。丸瓦部凸面、瓦裏面、外区圏線にはヘラ削りによる整形が行なわれる。色調は表面が灰褐色、内面がサンドイッチ状に黒色を呈す。胎土には長石・雲母のほかスコリア状の赤色粒子を多く含む。各部位の計測値は、瓦当径二四・二 cm、内区径一八・二 cm、中房径六・三 cm、中房高〇・九 cm、間弁幅四・四・八 cm、弁長四・六～五 cm、弁幅三・二～四 cm、外区幅二・七～三・三 cm、外区高一 cm、瓦当厚四・七～五・五 cm を測る。范の木目が不明瞭ながら認められる。4 のほかに表採品が一点あるが、4 と同一個体の可能性が強い。出土量が極めて少ない点と、瓦当径が著しく大きな点

から、通常の軒丸瓦ではなく、鳥衾などの棟先瓦であろうと思われる。現在のところ同范瓦は発見されていない<sup>(5)</sup>。

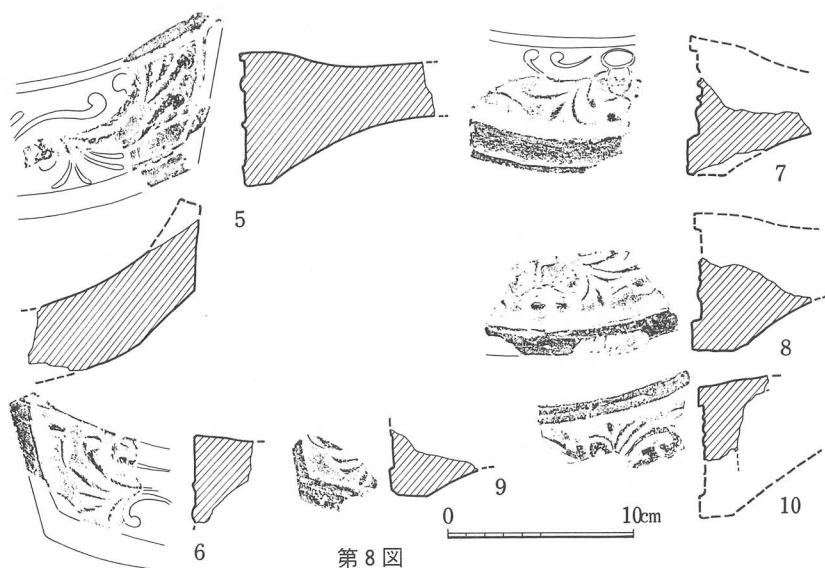
#### b 軒平瓦 (5～10)

一種類 (B I 型式)、六点出土した。

均整唐草文軒平瓦 (B I 型式) (5～10) 楕円形の環と二個の C 字形を重ねた文様の下に二個の珠文を置いた中心飾りを中心に、唐草を左右に三回反転させた均整唐草文である。唐草の先端は珠状に表現される。単郭素縁の外区をもつ。平瓦部に瓦当面用の粘土を貼りつけ、范を押圧し、側面と平瓦部凸面をヘラ削りにより整形したものである。頸部は曲線頸である。色調は表面が灰白色 (5～9)・青白色 (10) であるが、内面がサンドイッチ状に黒色を呈すものがある (7・8)。焼成は、灰白色を呈すものがやや不良で脆弱である。胎土には長石・石英・雲母のほかスコリア状の赤色粒子を含む。出土した六点は基本的には同じような文様であるが、唐草の細部の違いから二種類の范を確認した。曲線頸で、かつ均整唐草文である点から奈良時代後半の所産と考えたい。

B I 型式 1 類 (5～8) 唐草が全体的に太く直線的で繊細さを欠き、先端の珠状の表現は大きく誇張されている。2 類に比べ形式的で流麗さを失っている。各部位の計測値は、上外区幅〇～七 cm、下外区幅一・五～一・八 cm、脇区幅〇・九 cm、内区幅四・八～五 cm を測る。凸面頸部付近に縄叩きを残すものがある (7)。甲斐国分寺跡で同范瓦が出土している。

B I 型式 2 類 (9・10) 1 類に比べ唐草が曲線的で繊細なものを一括したが、更に種別が可能であろう。瓦当面に長石を主体とした砂粒が付着したものがあり (10)、范を押圧する際の「離れ砂」で



第8図

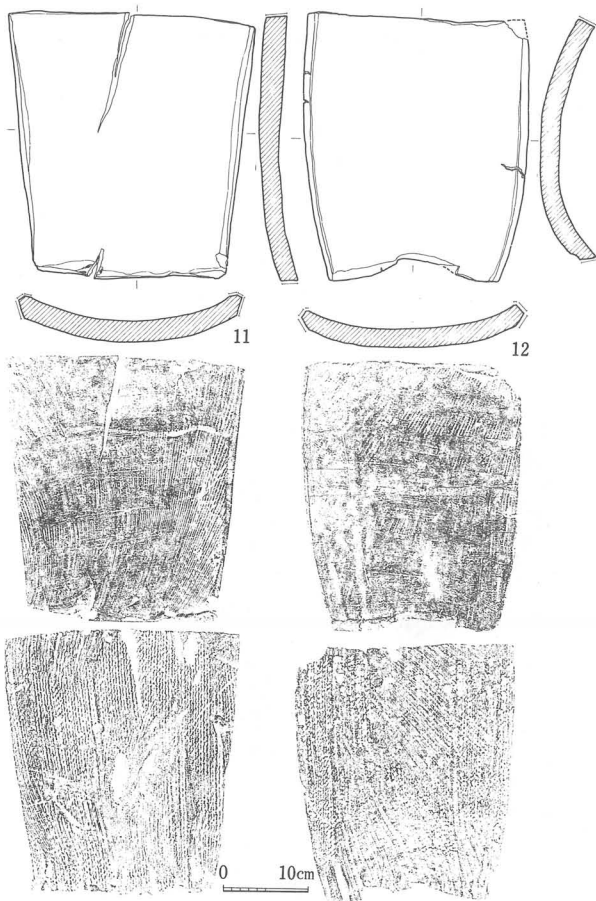
あろうと思われる。各部位の計測値は、上外区幅1 cm、下外区幅1・2 cm、脇区幅〇・七 cmを測る。甲斐国分寺跡・国分尼寺跡で同范瓦が出土しているほか、春日居町寺本廃寺でも同范かと思われるものがある。

c 平瓦(11)15)

全て歪んだり破損しているが、そのなかで完存した5点を報告する。いずれも一枚作りで、凸面は長軸方向の縄目叩き、凹面は布目痕上に主に短軸方向の粗いヘラナデを施し、側面はヘラ削りを行なう。凹・凸面ともに糸切り痕がみられる。凸面には長石を主体とした砂粒が多く付着するが、粘土と叩き板の離れをよくするため縄叩きを行なう際に粘土上にまいた「離れ砂」であろう。大きさは狭端幅一九〇二二 cm、広端幅二五〇二九 cm、長軸長約三〇 cm、厚さ一・七〇二・五 cmである。胎土には、長石を主体にスコリア状の赤色粒子を含む。側面部および凹面周縁部にみられるヘラ削り、凹面のナデの方向・回数によって数種類に分類が可能であろうが、全資料の観察を待って後日試みたいと思う。類例は甲斐国分寺跡・国分尼寺跡・八代町米倉廃寺跡・同久保遺跡で出土している。

11 狭端幅二二 cm、広端幅二九 cm、長軸長三〇・五 cm、厚さ二・二・五 cm、三・五六九 kgである。色調は青灰色を呈し、焼成は良好であるが、端部に大きくヒビが入る。凹面には短軸方向に幅広のナデが六回行なわれている。布目痕は1 cm当り一〇×一二本程度の細布である。凹面狭端縁部と凸面狭端側に指頭痕が認められる。これは生乾きの瓦を運ぶ際、狭端側を掴んで運んだことを示すものだろう。

12 狭端幅二〇 cm、広端幅二五 cm、長軸長三〇 cm、厚さ二・二・



第9図

度の荒布である。

14 狭端幅一九cm、広端幅二五cm、長軸長三〇cm、厚さ一・八〜二cm、二・六八kgである。色調は青灰〜赤灰色を呈し、焼成は良好であるが、狭端部隅が大きく歪む。凹面には弱いナデが長軸方向に五回、短軸方向に三回行なわれている。布目痕は一cm<sup>2</sup>当り七×八本程度の荒布である。

15 狭端幅二〇cm、広端幅二五cm、長軸長三〇cm、厚さ二〜二・三cm、二・九四kgである。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好であるが、凸面側に強く反る。凹面には弱いナデが長軸方向に三回、短軸方向に七回行なわれている。布目痕は一cm<sup>2</sup>当り六×七本程度の荒布である。

d 隅切り瓦(16)

平瓦の広端部隅を焼成前に斜めに切除した瓦である。一点のみ報告する。

16 狭端部が破損しているため、全体の大きさは不明であるが、推定広端幅や短軸長、ヘラ削りやナデの技法が平瓦と同じであることから、平瓦として一旦仕上げたものを隅切り瓦としていることが想定される。色調は青灰〜赤灰色を呈し、焼成はやや不良である。

凸面には縄叩き痕、凹面には布目痕上に短軸方向の幅広のナデが認められる。隅切りは凹面側から行なわれている。胎土は平瓦と同じ

二cm、二・三五七kgである。色調は赤灰色を呈し、焼成は良好であるが、凸面側に強く反る。凹面には短軸方向に幅広のナデが五回行なわれている。布目痕は一cm<sup>2</sup>当り六×六本程度の荒布である。

13 狭端幅一九cm、広端幅二五cm、長軸長三〇cm、厚さ一・七cm、三・九〇二九kgである。色調は青灰色を呈し、焼成は良好であるが、凸面側に強く反る。凹面には長軸方向に弱いナデが二回、短軸方向に幅広のナデが六回行なわれている。布目痕は一cm<sup>2</sup>当り六×八本程

である。布目痕は一 $\text{cm}^2$ 当り七×七本程度の荒布である。

# e 丸瓦 (17・19)

三点のみを報告する。いずれも玉縁式で、長さ三一・五 $\text{cm}$ 、広端幅一五・一六 $\text{cm}$ 、厚さ二・二・五 $\text{cm}$ を測る。粘土板を型に巻き、縄叩き・回転ヘラナデによる調整をした後、型をはずし内側から厚みの約半分まで刃物をあてて半截する。その後、凹面広縁部とその端面をヘラケズリによって調整する。側面は半截後原則として調整を

行なわず、分割時の割れ口を残す。胎土は平瓦とほぼ同じである。

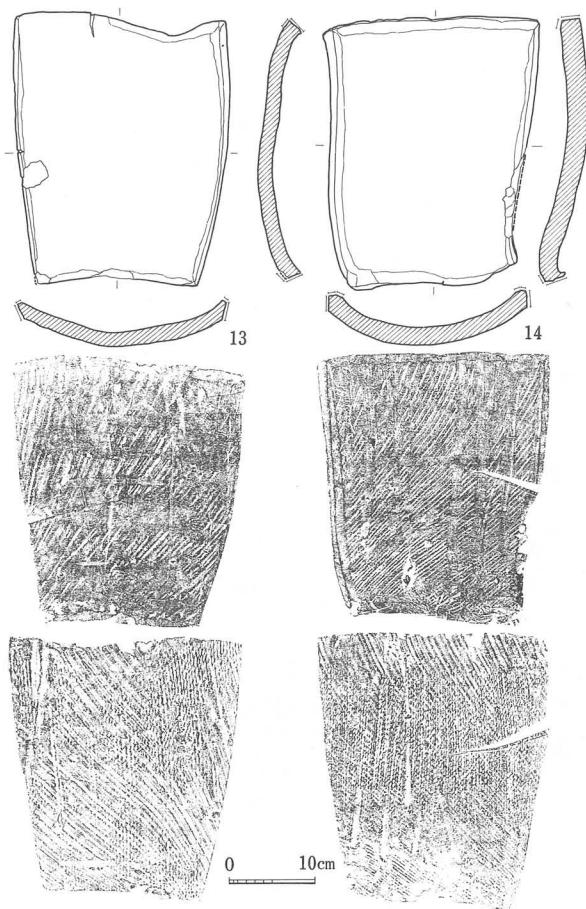
甲斐国分寺跡・国分尼寺跡から類例が出土している。

17 玉縁幅八 $\text{cm}$ 、広端幅一五・五 $\text{cm}$ 、玉縁長四 $\text{cm}$ 、長軸長三一・五 $\text{cm}$ 、厚さ二・二・五 $\text{cm}$ 、二・六三 $\text{kg}$ ではほぼ完形である。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。凸面丸瓦部及び玉縁部には短軸方向に幅広のナデを行なう。広端縁部のヘラ削りの幅は約五・五 $\text{cm}$ である。布目痕は一 $\text{cm}^2$ 当り七×八本程度の荒布である。

18 玉縁幅九 $\text{cm}$ 、広端幅一五 $\text{cm}$ 、玉縁長五 $\text{cm}$ 、長軸長三一・五 $\text{cm}$ 、厚さ二・二 $\text{cm}$ である。粘土板巻き付けはZ型で、接合痕を明瞭に残す。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。凸面丸瓦部及び玉縁部には短軸方向に幅七・八 $\text{cm}$ の回転ナデを行なう。玉縁端部は無調整で、砂粒を多く付着する。広端縁部のヘラ削りの幅は約五 $\text{cm}$ である。布目痕は一 $\text{cm}^2$ 当り八×九本程度の荒布である。

第10図

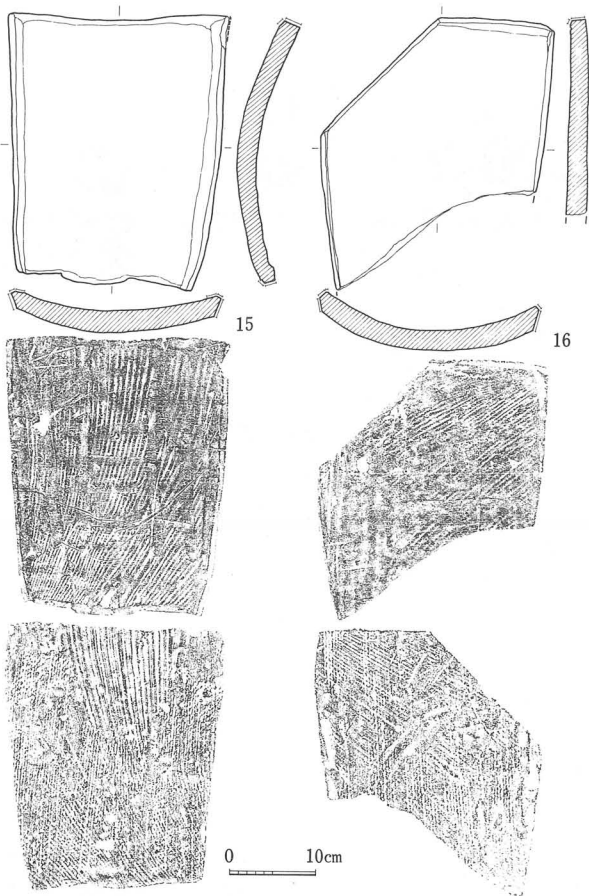
19 玉縁幅推定八 $\text{cm}$ 、広端幅一六 $\text{cm}$ 、玉縁長五 $\text{cm}$ 、長軸長三一・五 $\text{cm}$ 、厚さ二・二 $\text{cm}$ である。粘土板の接合痕が広端側に斜めに残り、接合痕上に指頭痕が連続する。粘土板の補足部に対する接合力を高めるための処置であろう。色調は灰褐色を呈し焼成は良好である。



凸面丸瓦部及び玉縁部には短軸方向に幅広の回転ナデを行なう。広端縁部のヘラ削りの幅は約4cmである。布目痕は1cm当り七×一〇本程度の細く荒布である。凹面には長石を主体とした砂粒が多く付着する。胎土は白色粘土を混合した粘土である。

(2) 埴 (第12図20、23)

遺物の取り上げ時点で確認した数量は一八点である。全て破片資料で、全形を復元し得る資料は皆無であるが、おおよそ九cm×六、



第11図

七cm×二〇cm以上の直方体を呈す長方埴である。相対する二面に縄叩き痕を残し、他の四面は無文であるものが多いことから、長方形の枠状の型に粘土を詰めて縄叩き等によって調整した後、型から抜き取ったものであろう。なお、縄の叩きには一定の方向性は看取できない。胎土には長石を主体とした砂粒を多く含むものが多い。埴は川田瓦窯址で方埴が表採されている。また甲斐国分寺でも方埴を中心に数点出土しているが、本瓦窯址と同一法量を示すものを確認していない。四点のみ報告する。

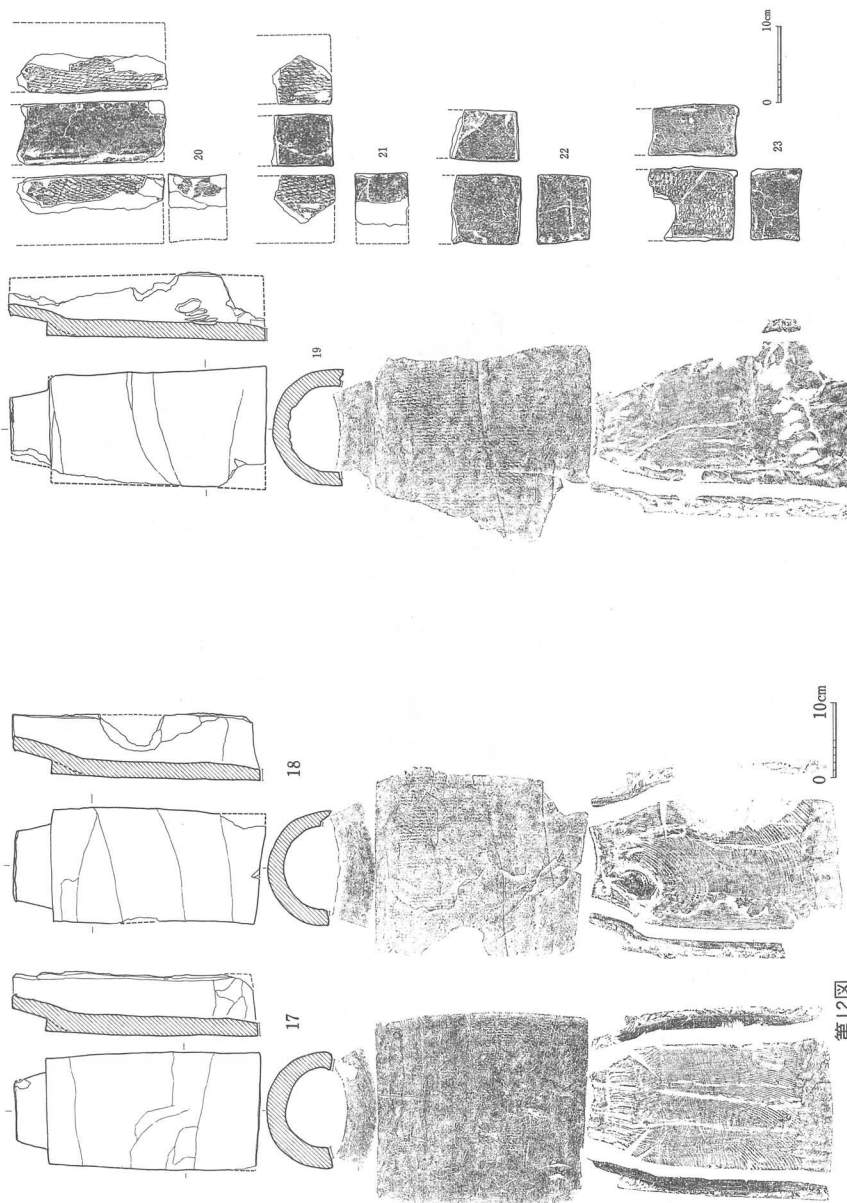
20 色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。二面に長軸方向の縄叩き痕が残る。白色粘土を少量混合した胎土である。

21 色調は表面が灰白色、内面が黒色を呈し、焼成は良好である。二面に短軸

方向の縄叩き痕が残る。

22 色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。二面の調整痕は明瞭ではない。胎土には砂粒を多量に含む。

23 色調は青灰褐色を呈し、焼成は良好である。一面に短軸方向の縄叩き痕が残るが、その対面の調整痕は不明瞭である。胎土には砂粒を多量に含む。



第12図



(3) 土器

a 一号住居址出土土器（第13図）

1 は坏形土器で、口径一三・八cm、器高三・五cmを測る。外面口縁部および内面は横ナデ、外面胴下半より底部にかけては横方向のヘラケズリが施されている。また、内外面ともに赤色塗彩されている。胎土は長石粒子や赤色粒子を含み精選されている。

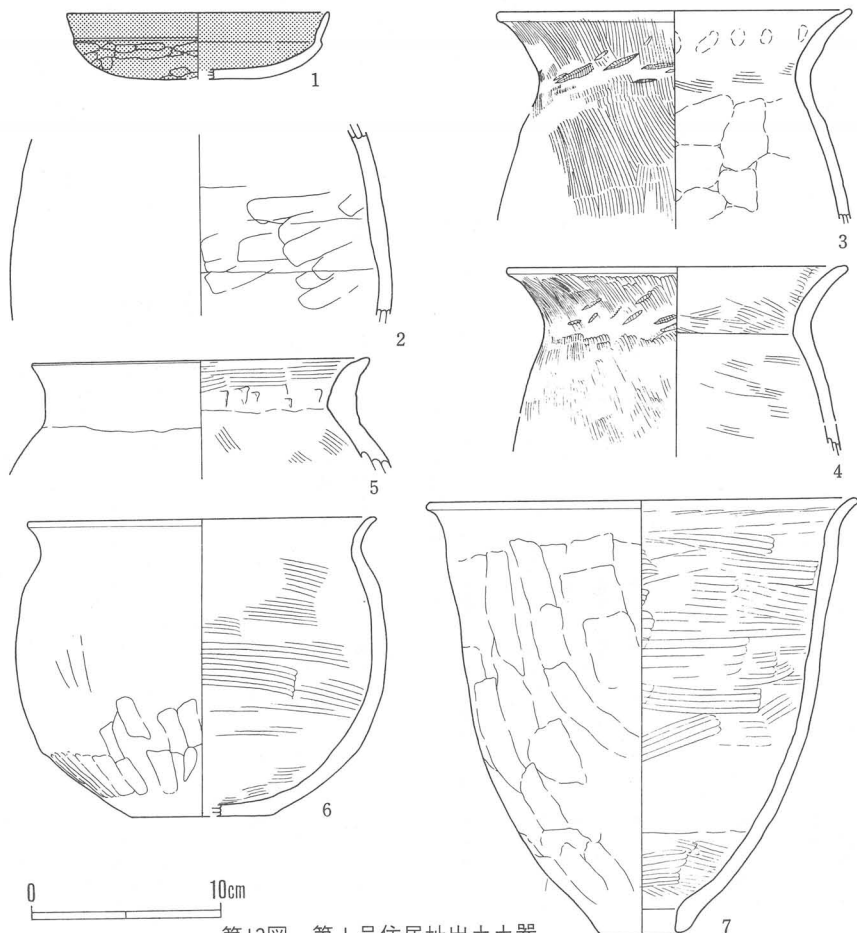
2は甕形土器である。

2は甕形土器の胴上半部であるが、炉体土器として逆位に使用されていた。内外面ともにナデ調整がされている。胎土は長石、角閃石を含み、色調は褐色を呈する。

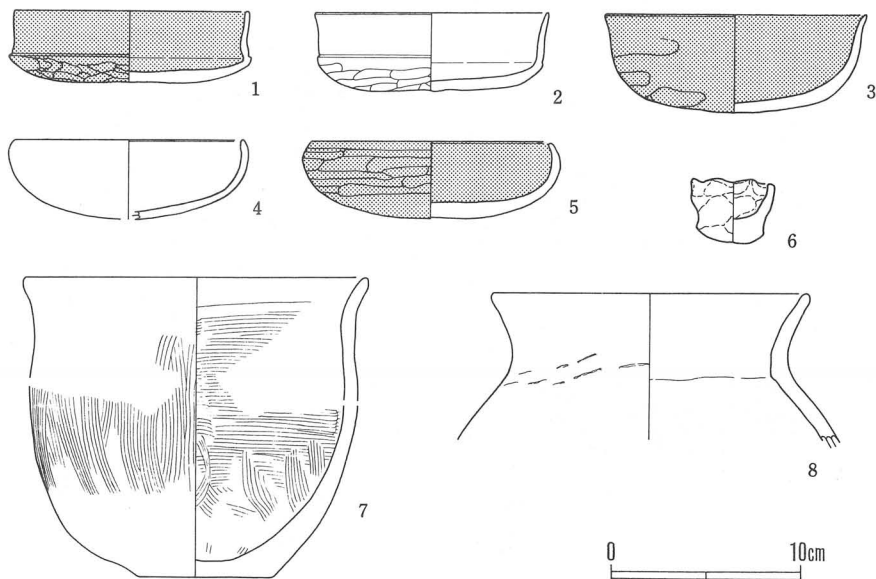
3は口径一八・六cmを測る。外面は縦方向の刷毛目が施されており、頸部には横方向のナデ調整がされている。内面は横方向の刷毛目が施された後、指によってナデおよびおさが行われている。

4は口径一七・八cmを測り、整形は3とほぼ同様に行われているが、内面のナデはみられない。

5は口径一七・六cmを測り、胴張り



第13図 第1号住居址出土土器



第14図 第2号住居址出土土器

の形態を呈し、口縁部は非常に厚く作られている。胎土は長石小粒子を多量に含み、色調は褐色を呈する。

6は小型甕形土器で、口径一八・四cm、器高一五・六cmを測る。外面は縦方向のヘラ削りの後、ナデ調整がされている。内面は横方向の刷毛目調整が施されている。胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。

7は甕で、口径二二・六cm、器高二二・八cmを測る。外面は刷毛目を施した後、ヘラナデされている。内面も刷毛目を施した後、ナデ調整を行っている。胎土は長石粒、石英粒、赤色粒等を含んでおり、色調は褐色を呈する。

以上の一括の出土土器は、その特徴から六世紀前半代と考えられる。

#### b 2号住居址出土土器（第14図）

坏形土器（1～5）、手捏土器（6）、甕形土器（7～8）がみられる。

1は口径一二・二cm、器高三・八cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がり稜を有する。外面口縁部および内面はヘラミガキ、外面下半部から底部にかけてはヘラ削りが施されている。胎土は、赤色粒子を含み精選されている。色調は褐色を呈し、内外面ともに赤色塗彩されている。

2は口径一二・四cm、器高四・一cmを測る。1よりも口縁部がやや外反する。整形および胎土はほぼ1と同様であるが赤色塗彩の痕跡は認められない。

3は口径一三・八cm、器高五・二cmを測る。体部は比較的ゆるやかに立ち上がり、口縁部のみ外反する。外面口縁部および内面はヘ

ラミガキ、外面体部から底部にかけてはヘラ削りが施されている。胎土は、長石粒、石英粒、赤色粒等を含む。色調は茶褐色を呈し、内外面ともに赤色塗彩されている。

4は口径一二・〇cm、器高四・二cmを測る。体部に稜を持たずに口縁部が内湾する。外面はヘラ削り後、ヘラミガキがされており、内面もヘラミガキされている。胎土は赤色粒子を少量含むのみで精選されている。色調は赤褐色を呈する。

5は口径一三・六cm、器高四・一cmを測る。整形は4とほぼ同様になされている。胎土は長石粒、石英粒を少量、赤色粒子を多量に含む。色調は褐色を呈し、内外面ともに赤色塗彩されている。

6は手捏土器で、器高三・四cmを測る。体部内外面ともに指頭痕がみられる。胎土は赤色粒子を含み、色調は褐色を呈する。

7は口径一八・〇cm、底径七・〇cm、器高一五・八cmを測る。内外面ともに刷毛目整形が行われている。その後、外面下半部および内面口縁部、下半部はナデ調整が施されている。胎土は密で長石粒、石英粒を多く含む。色調は赤褐色を呈する。

8は口径一六・八cmを測る。胴部を欠損しているが胴張の形態を呈するものと考えられる。器面が荒れており、外面の整形については正確にはわからないが、ヘラ状工具痕が頸部にいくつかみられ、ヘラ状工具によってナデ調整が行われたものと思われる。内面もナデ調整が行われている。胎土は密であるが長石粒、石英粒、赤色粒等を多量に含んでいる。色調は褐色を呈するが一部に焼きむらが認められる。

以上の出土土器はその特徴から1号住居址同様、六世紀前半代であると考えられるが、坏の形態からすると本遺構の方が若干古式で

あろうか。

#### c 遺構外出土土器（第15図）

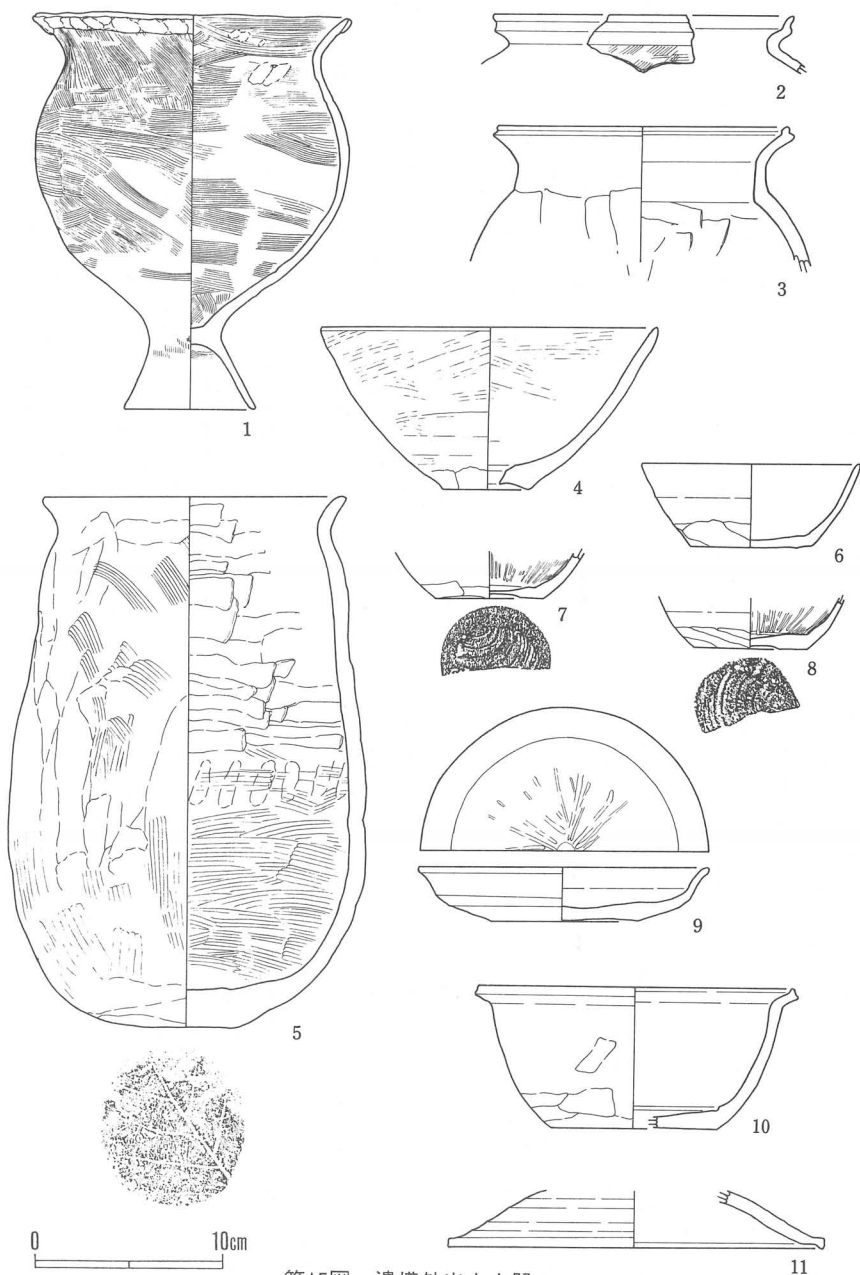
今回の調査では遺構外からも図化できるような土器が何点か出土している。

1は1号トレンチ出土の台付甕である。口縁部は折り返し口縁で、折り返し部には連続指頭押圧痕が明瞭に残っている。口径一六・八cm、器高二一・〇cm、底径七・〇cm、最大径は胴部中央で一六・六cmとなっている。外面には口縁部から頸部にかけては縦位ないし斜位の、胴部は横位の細かい刷毛目が施され、胴下半部はナデ調整が行われている。内面には横位の刷毛目が施されている。胴中央部に煤の付着がみられる。胎土は白色砂粒および赤色粒子を含み、器面はややザラついているが、焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。

2は5号トレンチ出土。S字状口縁台付甕の口縁部の小破片である。推定口径一六・〇cmを測る。外面には斜位および横位の刷毛目が施されている。胎土は白色砂粒および赤色粒子を多く含む。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

3は6号トレンチ出土。甕形土器の口縁部の破片である。胴部はやや張り出すものと思われる。頸部は逆コの字状に作られており、口縁部は強く外湾する。口唇部および口縁内側は凹面をなしている。内外面ともにヘラ状工具によってナデ調整が行われている。胎土は密で長石粒、石英粒、赤色粒等を比較的多く含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

4は6号トレンチ出土の小型甕である。口径一七・八cm、器高九・六cm、底径四・六cm、孔径一・二cmとなっている。内外面ともに斜



第15図 遺構外出土器

位の刷毛目が施された後、ヘラ状工具によってナデ調整されている。胎土は雲母および赤色粒子を微量に含むのみで精選されている。色調は褐色を呈する。

5は5号トレンチ出土の甕形土器である。口径一六・四cm、器高二八・二cm、最大径は胴下半部にあり一九・一cmとなっている。外面は縦位の刷毛目を施した後、ヘラ状工具によってナデ整形がされている。内面は横位の刷毛目を施した後、胴上半部はヘラ状工具によってナデ整形がされている。また、中央部には指頭痕がみられる。底部には木葉痕が明瞭に残っている。胎土は長石粒、石英粒、赤色粒を多く含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好であるが、口縁部から底部にかけて広く焼きむらがみられる。

6は9は坏形土器で、6は8は7号トレンチより、9は3号トレンチよりそれぞれ出土している。

6は口径一一・四cm、底径六・六cm、器高四・五cmを測る。内外面ともに横ナデがされており、底部ないし体部下半は手持ちヘラ削りされている。器面は荒れており、内面に暗文が施されていたかどうかは不明である。胎土はやや荒れており、赤色粒子を含む。色調は茶褐色を呈する。

7は底径五・八cmを測る。内外面ともに横ナデがされており、体部下半には手持ちヘラ削りがされている。底部は回転糸切り後、周辺のみヘラ削りしている。内面には放射状の暗文を持つ。胎土は密であるが白色砂粒子を含む。色調は褐色を呈する。

8は底径六・〇cmを測る。整形は8とはほぼ同様である。胎土は精選されており、白色砂粒子等を若干含む。色調は褐色を呈するが、一部に焼きむらが認められる。

9は盤状形を呈する皿である。口径一五・四cm、底径八・〇cm、器高二・九cmを測る。底部の端は角ばって口縁部へと至る。口唇部は丸みをおび、外反する。内面および口縁部は端正にナデ整形が行われている。底部および体部下半は回転ヘラ削りが行われている。みこみ部には放射状暗文が施されている。胎土は精選されており、赤褐色を呈する。

10は7号トレンチ出土の鉢形土器である。口径一六・八cm、底径八・八cm器高七・五cmを測る。内外面ともに横ナデがされており、体部下半には手持ちヘラ削りがされている。底部は糸切り後、周囲二cm程度をヘラ削りしている。胎土は密で、赤色粒子、雲母を微量含む。色調は茶褐色を呈する。

11も7号トレンチより出土の蓋である。推定口径二〇・〇cmを測る。口縁部内面は凹面を作っている。内外面ともに横ナデがされているが、天井部外面にヘラ削りが施されたかどうかについては不明である。胎土は密であるが、赤色粒子を多く含む。色調は褐色を呈する。

以上、遺構外出土土器についてそれぞれの器形・整形技法等について説明を行ったが、それぞれの遺物の時期については、出土状況の制約から検討を加えることは困難であるものの、先学の編年的研究に照らしあわせながらその年代観について考えてみたい。

それぞれの特徴から1は弥生時代後期後半代、2は古墳時代前期前半代、3は5は古墳時代後期の所産であるものと考えられる。6は8はいわゆる甲斐型環であるが、6は9世紀第3四半世紀、7・8は9世紀第4四半世紀に比定されるものと思われる。9は盤状の皿で9世紀第4四半世紀の年代が与えられよう。10は器形および口

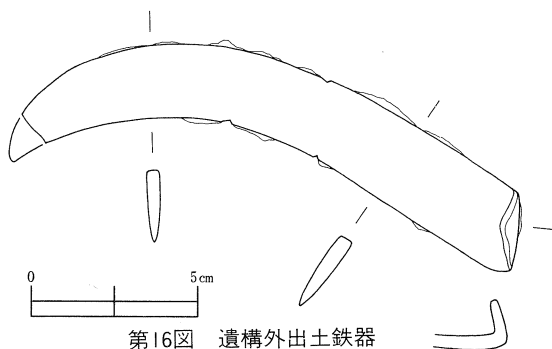
縁部形態が特徴的であり、東八代郡御坂町二の宮遺跡304号住居址に種例がみられる。304号住居址のセツト関係は9世紀第4四半世紀の年代が与えられていることから、ほぼ同時期と考えられるであろう。11はつまみを欠損しており断定はむずかしいが、やはり9世紀後半代の所産であろう。

#### (4) 鉄製品 (第16図)

鉄鎌。3号トレンチより第15図9の盤状皿に近接して出土。身部全体が大きく湾曲し、装着部は上半部のみを折り返している。茎部および刃部はそれほど幅を変えずに先端部へと続く。先端部をやや欠損するものの、現存長一五・〇cm、刃部三・〇cm、茎部一二・〇cm、最大幅二・四cmを測る。

### 六 考 察

今回の調査は、瓦窯址の調査と製品の供給ルート・製作技術の系譜の解明を主目的とした学術発掘である。したがって、ここでは灰原と考えられた瓦窯の一部とその出土遺物に焦点を当てて考察する。それ以外の遺構・遺物については割愛し、稿を改めて言及したいと思う。



第16図 遺構外出土鉄器

今回の調査区内では窯の本体は発見できなかったが、地形・遺物の出土状況から調査区周辺に平窯形態の構造窯の存在を予想した点については前述の通りである。本調査区内では6・7号トレンチ以外に瓦の集中箇所がないため窯跡は一基のみであろうと思われるが、調査区西の農道を挟んだ西側ブドウ畑中には地中レーダー探査によって数基の窯跡の存在が予想され、表土中より瓦が採集された。したがって本遺跡の瓦窯址は一基のみ単独で存在したのではなく、複数基によって構成された「上土器瓦窯址群（仮称）」中の一瓦窯である可能性が高い。ただし、瓦窯址群の形成過程・同時期における操業形態については明らかではなく、6・7号トレンチで発見された瓦窯址がこの瓦窯址群全体の中でどのような位置付けにあったのか、今後周辺の調査を行なうことによって解明する必要がある。

灰原から発見された遺物には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の他に、屋根の特定の位置に用いられる隅切り瓦、鳥衾かと思われる直径の大きな軒丸瓦や、基壇部の装飾に関係したと思われる埴がある。このうち軒丸瓦の同范関係、平瓦・丸瓦の類例の存在によって、本瓦窯の製品の供給先は一宮町甲斐国分寺跡・国分尼寺跡であることが確実となった。特にAⅠ型式の軒丸瓦は国分寺出土の軒丸瓦中最も多く、半数以上を占めることを確認している。そのほかに供給先の建造物の性格は不明であるが、八代町方面にも運ばれているようである。しかしその量は微々たるものであり、あくまでも供給先の主体は国分寺・国分尼寺であると考えられる。

これらの瓦類は全て同時期に焼成されたと断定することはできないが、窯が操業していた比較的短期間の製品であることに間違いはなからう。その中に通常の瓦の他に特定の瓦や埴を含むことから、

本瓦窯は国分寺・国分尼寺中の構造物の建立に際して、その初期の段階から瓦を主体とした窯業製品の製造部門を担っていたのではないだろうかと思われる。しかも軒丸瓦・軒平瓦に同文異範がそれぞれ二種類確認されたことにより、多量の軒丸瓦・軒平瓦の需要に応じるために、複数の同文の範を用いて多量の瓦が生産されたことを推定することができよう。以上の点から、本瓦窯址は国分寺・国分尼寺の創建期に関わる瓦窯と考えることができる。

ところでAⅠ型式の軒丸瓦については、従来素弁八葉の百済様式であることから国分寺の前身寺院を飾る瓦として奈良時代前半期に位置付ける考え方が提起されていた。しかし今回の調査でAⅠ型式と伴出したのは、奈良時代後半と考えられる均整唐草文の軒平瓦BⅠ型式であった。また平瓦や丸瓦の製作技法は奈良時代後半に位置づけるのがふさわしい。しかも前述したようにいくつかの理由によって、本瓦窯址が国分寺・国分尼寺の創建期に関わるものであると推定されることから、AⅠ型式の軒丸瓦は国分寺・国分尼寺が奈良時代後半に創建された際の所産と考えるのが妥当であろう。ただしその瓦当文の様式的な系譜については、重圈をもつ百済様式であるという点で白鳳時代の寺院址である春日居町寺本廃寺からの流れを考慮しなければならぬ。

ここで注意したいのは、寺本廃寺でAⅠ型式の軒丸瓦が全く出土していない点である。寺本廃寺では三次にわたる調査によって瓦の全貌がほぼ明らかとなったが、それによれば寺本廃寺独自の軒丸瓦のほかに、国分寺と同範関係をもつ「軒丸瓦Ⅳ」・「軒丸瓦Ⅴ」・「軒丸瓦Ⅶ」が存在し、国分寺建立以降の補修瓦と考えられている。AⅠ型式の軒丸瓦が寺本廃寺で出土していない理由として考えられ

るのは、国分寺の創建時にAⅠ型式の軒丸瓦が甲斐国分寺独自の瓦として新たに考案・使用され、当時既に存在していた寺本廃寺とは厳然と区別するために、決して寺本廃寺には葺かれることがなかったのではなかろうか。国分寺の瓦窯である土器瓦窯址が、寺本廃寺の瓦窯である川田瓦窯址から約五百m離れて位置していることについても、寺院の性格・建立に至る背景の違いが反映しているのではなかろうかと思われる。ただ国分寺の瓦当文の系譜を寺本廃寺から辿ることができることから、寺本廃寺の建立者、あるいはその建立に関わる技術集団が甲斐国分寺建立に関与していたであろうことは十分予想されよう。

今後は甲斐国分寺の瓦の分析を進めながら、今回の報告で提起した仮説を検証するとともに、寺本廃寺、川田瓦窯址との比較によって古代甲斐国における瓦の変遷を明らかにし、寺本廃寺から甲斐国分寺への系譜について改めて考察したい。

## 七 おわりに

土器遺跡の調査は、甲府市史編さん委員会（委員長 磯貝正義）の考古・古代・中世専門部会 専門委員 田代孝・萩原三雄の指導のもとで、調査員 宮沢公雄・櫛原功一（山梨文化財研究所研究員）が担当した。本報告の執筆は一・二を田代が、五―二―（3）（4）を宮沢が、そのほかを櫛原が分担した。

なお発掘調査及び本文の作成にあたって次の諸氏に御教示、御助力を賜ったことを記して厚く御礼申し上げたい。（敬称略）

相沢一江・石山礼子・伊藤晴雄・猪股喜彦・内田裕一・落合松代・河西学・久保寺春雄・久保寺弘子・小林森雄・小宮山恵美子・坂本

美夫・佐野勝広・椎名慎太郎・十菱駿武・末木健・鈴木稔・外山秀一・中山誠二・平出知恵子・福島登貴子・宮川昌蔵・渡辺広勝  
最後になりましたが、発掘調査を円滑に進めるためご尽力をいただいた事務局の高木伸也・数野雅彦の両氏、及び調査に際して深い御理解のもと積極的な御協力をいただいた地権者の山田哲氏には心から感謝申し上げます。

# 註

(1) 山梨文化財研究所の河西学氏（地質・火山灰研究室）の分析による。参考文献3。

(2) 地権者山田哲氏が二十年ほど前に今回の調査区付近で発見し、保管していた資料を含めた。

(3) 今回の報告をまとめるにあたり、一宮町教育委員会 猪股喜彦氏の御好意で甲斐国分寺跡・国分尼寺跡の出土遺物・表採遺物を観察させていただいた。

(4) 八代町郷土館所蔵。注記には「北通称寺屋敷」とある。縄叩き痕をもつ平瓦片が同一地点で出土しているようである。

(5) 猪股喜彦氏の御教示による。

(6) 佐原氏の分類に基づく。参考文献2。

(7) 参考文献17を参照。

## 参考文献

- 1 上野晴朗 「甲斐国分寺」（『一宮町史』 一宮町史編集委員会 一九六七）
- 2 佐原真 「平瓦桶巻作り」（『考古学雑誌』 58—2 日本考古学会 一九七二）
- 3 町田洋・新井房夫 「広域に分布する火山灰―始良Tn火山灰の発

見とその意義―」（『科学』 46 一九七六）

4 佐野勝広 「甲斐の古瓦の様相」（『丘陵』 第8号 甲斐丘陵考古学研究会 一九八〇）

5 佐野勝広 「甲斐国分寺の鎧瓦・字瓦」（『甲斐考古』 18の2 山梨県考古学史料室 一九八一）

6 一宮教育委員会 『史跡 甲斐国分寺跡―昭和56年度発掘調査概要―』 一九八二

7 一宮教育委員会 『史跡 甲斐国分寺跡―昭和57年度発掘調査概要―』 一九八三

8 坂本美夫・末木健・堀内真「奈良・平安時代土器の諸問題―山梨県」（『神奈川考古』 第一四号 一九八三）

9 末木健・坂本美夫「山梨県」（『古墳時代土師器の研究』 一九八四）

10 佐野勝広 「甲斐国分寺をめぐる一視点」（『甲斐考古』 21の1 山梨県考古学史料室 一九八四）

11 岡本東三 「屋瓦とその技法」（『日本歴史考古学を学ぶ』 一九八六）

12 森郁夫 『瓦』 一九八六

13 上原真人 「仏教」（『岩波講座 日本考古学』 4 一九八六）

14 甲府市教育委員会 『甲府市の遺跡』 一九八六

15 佐野勝広 「甲斐国分寺の創建年代をめぐって」（『山梨県考古学協会地域大会要旨集』 第4号 一九八七）

16 猪股喜彦 「甲斐国分寺遺跡を掘って」（『山梨県考古学協会地域大会要旨集』 第4号 一九八七）

17 春日居町教育委員会 『寺本庵寺』 一九八八